

～TANKYU～

谷地南部小学校
校内研究だより
2024. 1. 26
No.47 文責 伊藤

人生100年時代

江戸時代に比べると平均寿命も倍以上に増え、世の中の流れとしては定年退職年齢も次第に伸びていく予定となっています。その中で、「小学校の位置づけとは何か」「小学校段階でどのようなことができるといいか」「教員は何をすればいいか」を考えて指導に臨まなければいけないと感じています。あくまでも私個人の考えですが、ご一読ください。また、次号以降で、ぜひ先生方の考えをお聞かせください。

私の考える小学校とは、**「種蒔き・芽出し」**です。

幼稚園・保育園・こども園の先生方は、就学前の子ども達を大切に見取り、心に寄り添って対応したり、時には手放して遠くから見守ったりしながらていねいに育てて小学校に送り出してくださいました。つまり就学前は、**「土づくり」**だと言えます。

就学前に整えてくれた土壌に、「どんな種を蒔くのか」「どの時期に（タイミング）蒔くのか」「どれくらい蒔くのか」「どのあたりに蒔くのか」などを考えるのが小学校の時期なのかなと、私は考えています。だから私は、子どもがやりたいと思ったことにはできる限りチャレンジさせたいと思っているし、子どもの様子を見ながら「〇〇やってみたら?」「これはどう?」などと、 $+ \alpha$ を与えていきたいと感じています。取り組んだもの（種）の、どれが芽吹くか、いくつ芽吹くかは分かりません。でも、種を蒔かないことには基本的に芽吹くことはありません。少しでも多くの芽を出させた状態で中学校に引き継ぎたいものです。（できれば、質も）

その芽を見て、「どの芽を伸ばしていくか」「どこまで伸ばしていくか」「どの芽を摘むのか（状況によっては必要だと思います）」を考えて取り組んでいくのは、中学校以上の段階ですることかなあと感じています。

幼保小連携・小中連携といった面からも、小学校段階でいろんな芽を育むことができるように、「**全職員・全児童でみんなを見て**」いきましょう。

